【研究ノート】

# ツタンカーメン王墓出土のトランペットに関する一考察

### 野中亜紀\*

#### 1 はじめに

古代エジプトの王朝文明は、紀元前 3000 年頃にナイル川流域に生まれた。一般的に、西洋音楽史において世界最古の楽譜と考えられているのは、ウガリットで発掘された紀元前 14 世紀頃の粘土板であるともギリシャの碑文であるともいわれているが<sup>1)</sup>、それより前のエジプトの地において音楽は記譜され視覚化されたのではないか、と考えたのが研究の端緒であった。

筆者は、現在中王国時代(前 2025-前 1793 年ごろ)・新王国時代(前 1550-前 1070 年ごろ)の音楽がどのようなものであったかを明らかにするため、音楽の場面が描かれていた墓の図像を収集・分析し研究を進めている。中王国時代・新王国時代ともに楽器についてはさまざまな研究がなされているが、音楽学とエジプト学双方の観点からこれらの時代の音楽について論じた研究は、管見に及ぶ限り例がない。

本小論では、新王国時代のツタンカーメン王墓から発掘された TUT's Trumpets と呼ばれる遺物を取り上げる。この遺物は、出土品の中でも唯一演奏できる楽器であるとともに、西洋音楽で使用されるトランペットの原型である、とこれまで評価を受けてきた<sup>2)</sup>。本研究ノートでは、先行研究及びその問題点を明らかにした上で、このツタンカーメンのトランペットについて再評価を試みたい。

### 2 古代エジプトのトランペット

#### (1) 図像資料

古代エジプトのトランペットは、シェネブと呼ばれていた。図像資料において、最初にトランペットが描かれたと考えられる図像(図 1)は、古王国時代の第5王朝から第6王朝初期(前2300 年ごろ)の時代の貴族カゲムニの墓のレリーフである<sup>3)</sup>。頭髪をあみこんで垂らしている少年は左手にガチョウを持ち、そして右手に管楽器のようなものを持っていると考えられているが、ベル(と思われる)部分が欠落していることにより、これ以上の推定は不可能である。

<sup>\*</sup>国際人間学研究科国際関係学専攻 博士後期課程

ついでトランペットの存在が確認されるのは、それより 1000 年以上後の新王国時代第 18 王朝の女王、ハトシェプストの葬祭殿(前 1460 年ごろ)に彫られたレリーフである。図2のレリーフは、葬祭殿第1テラスの南柱廊の壁に描かれた、祭りの際に兵士が行進する場面に関するものである。

トランペットもしくは管楽器が描かれていると断言できる図像資料としては、このハトシェプスト女王葬祭殿のレリーフが一番最初である。その後、アマルナ時代の壁画には多くのトランペットが登場する。そうしたトランペットが描かれるのは、兵士たちの行進の場面であり(図3、図4参照)、これはすなわち軍隊に関連した場面である。しかし、行進場面には出てくるものの、戦闘場面で描かれた例はない。

他には、テーベの貴族墓に描かれた例は見られる4)が、王墓には見出すことができない。

この種の「トランペット」に関しては、「歌の伴奏楽器」との見解が述べられることがあるが<sup>5)</sup>、 その予想される音を考慮に入れると、「伴奏楽器」として用いられる可能性はないと考える。そ の音については「3 音を鳴らす実験について」で詳述する。



図 1 カゲムニの墓のレリーフ 第 6 王朝 サッカラ (ヒックマン 1986: 図 18)



図 2 ハトシェプスト女王葬祭殿のレリーフ 第 18 王朝 ディール・イル・バハリ (Hickmann 1946: 4-fig. 1)

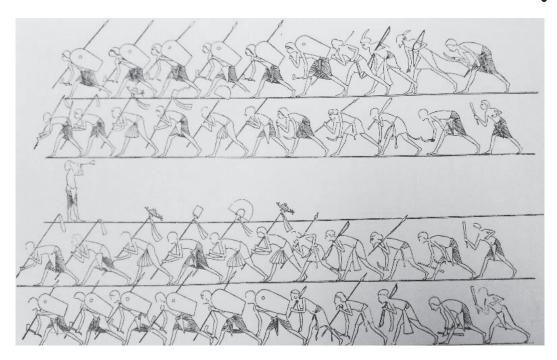


図3 アハモセの墓のレリーフ 第18王朝 テル・エル・アマルナ (Hickmann 1946: 5-fig. 4)





図4 アマルナ時代の壁画

(左:メトロポリタン美術館 1985.328.9、右:メトロポリタン美術館 1991.240.14)

#### (2) 遺物資料

ツタンカーメン(トゥトアンクアメン)は、第 18 王朝末期の王(前 1330 年ごろ)であり、1922 年にハワード・カーターによってほぼ未盗掘の状態 $^6$  で王墓が発見された。古代エジプト史において際立って有名な王ではないが、発掘された多数の豪華な埋葬品と黄金のマスクなどで知られる。

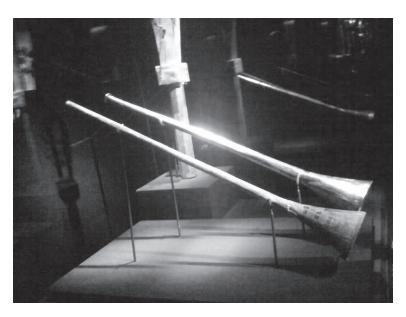


図5 ツタンカーメン王墓 (KV62) から発掘されたトランペット (カイロ博物館 C.G. 69850, C.G. 69851)

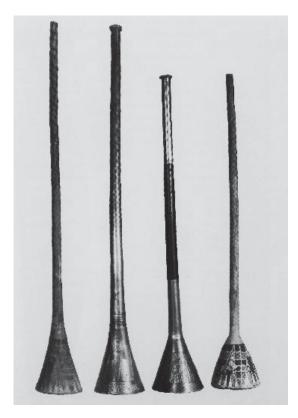
前述したように、このトランペットが唯一演奏することが可能と考えられており、また唯一の現存品でもある。以前は、ルーブル美術館にトランペットが所蔵されていたものの $^{7}$ 、後に香油台であったことが確認されている $^{8}$ 。その他には、ピートリーが発掘したとされるトランペットが存在したものの、盗難にあい現在は行方が不明である $^{9}$ 。

そこで本項では、このツタンカーメン王墓から出土した2本のトランペットについて検討してみたい。表1のトランペット1が図6の左から2番目、トランペット2が右から2番目のものを示している。先行研究では、これら2つのトランペットは対になった楽器と考えられてきた $^{10}$ 。

表 1

	素材	サイズ	装飾	発掘された場所
トランペット1	銀 (吹口の内側金)	58.2cm 吹口 1.7cm (直径) ベル 8.2cm	ベルの部分に金の装飾 ラー・ホルアクティ アメン・ラー プタハ	玄室東南角
トランペット2	銅または青銅 (吹口の内側銀)	49.4cm 吹口 1.3cm (直径) ベル 8.4cm	吹口、ベルの部分に金箔の装飾 ラー・ホルアクティ アメン・ラー ツタンカーメン プタハ	前室出土の木箱 (50) 内

まず双方の素材及び長さは、トランペット 1 が 58.2cm、トランペット 2 が 49.4cm であり、8.8cm 長さが異なる。また、素材も銀と銅(または青銅)で異なることから、音楽学的にみて、和声を 発生させることは不可能と考えられる。したがって、同時に演奏されたとは考えにくい。



**図 6** TUT's Trumpets (マニケ 1996: 図 25)

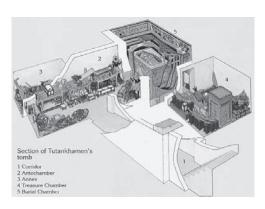


図7 ツタンカーメン王墓

(Image credit Stefano Berini)

続いて出土状況を見ると、トランペット1は玄室(図7の5の部屋)の東南角から発見された。ランプ(173)の下に木材に包まれて置かれていたため、葬儀の際に演奏し、その後すぐに玄室に安置したと考えるのはやや無理があるように推察する。筆者は冥界への道のりに際し、来世への旅立ちに供えてランプによる明かりと、トランペットによる音が必要と古代エジプト人が考えていたのとの仮説を抱いている<sup>11)</sup>。

また素材が銀であることを考えれば、当時のエジプトで銀は大変高価だったため、演奏目的で作られたのではない可能性もあろう。トランペット2は、前室(図7の2の部屋)におかれた木箱(50)<sup>12)</sup>から発見された。よってこれら2本のトランペットはそれぞれ異なる場所に安置されていた訳であり、その点をみてもトランペット1とトランペット2が対の楽器であったと考えるのには無理がある。

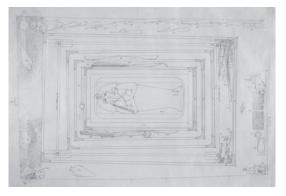


図8 玄室の出土品状況 (Cater, H and A Mace: 1923-1933)



**図 9 前室の箱(50)** (Cater, H and A Mace: 1923–1933)

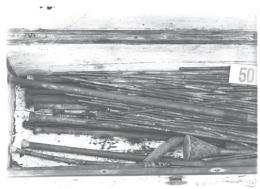


図 10 前室の箱(50)の中身 (Manniche 1976: PLATE XII)

さらには、これらのトランペットにはそれぞれ木製のトランペットが付随していた。マニケは、トランペットは「王の眠りを妨げないようにする装置」であると共に「持ち運び」用の楽器であり、木製トランペットは、その運搬時に楽器の中に入れて使用したと述べる<sup>13)</sup>。しかし、この見解に関しても、音楽学的に考えればこの種の楽器は容易に変形してしまうため、トランペット制作時に楽器の型を取るために用いられた可能性も考えられる。

なお、各トランペットのベル部分には図像が描かれており、同じくマニケは、別稿で当時の軍の名前から神々が描かれたのではないかと述べる $^{14}$ 。ただしこのツタンカーメン王墓からは他にも「クラッパー」と称される「拍子木」類の楽器が発見されており $^{15}$ 、同王が生まれ育ったアマ



図 11 トランペット 1 のベル



図 12 トランペット 2 のベル (Manniche 1976: PLATE X, XI)

ルナ時代のものであることが確実視されているが、この TUT's Trumpets も同時代と考えた場合、それまでの神々を廃し、アテン神一神教を推し進めたただ中にあったツタンカーメンの(アマルナ時代及びアマルナ時代からの移行時期)の軍隊に、アテン神以外の神々の名前を積極的に用いたかという点に関しては今後検討の余地があると考える。

加えて音楽学的にみれば、現代のトランペットは吹き口にマウスピースを装着して演奏する楽器である。TUT's Trumpets におけるマウスピースの有無に関しては、図 13 を細かく見た場合、吹き口は管の内側に別の管が作られ、外側の端部はリングをはめたような外側に張り出した構造を呈している。

たとえマウスピースの素材が葦のような素材で作られていたとしても、他の植物類が玄室内で発見され、また本トランペットが箱の内部に収められていた点を考慮すれば、その存在がまったく消失することは可能性として低いものと推察される。さらには、図 2、図 3 の図像資料からも演奏者が奏法の際にずれないよう、トランペットの吹き口に近い部分を握っていた様子がわかる。よってマウスピースは、これらの TUT's Trumpets に付随していなかったと考えるのが妥当であろう。

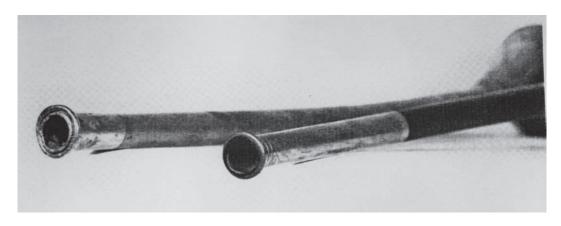


図 13 TUT's Trumpets の吹き口

(Manniche 1976: PLATEVIII)

### 3 音を鳴らす実験について

また、実際に音を鳴らしたとする有名な実験についても見解を述べておきたい。1939 年にイギリス BBC 放送にて、「チェリー・ピッカーズ」のバンドマンであるジェームズ・タパーンが TUT's Trumpets を初めて吹いたと主張しており $^{16}$ 、これは現在でもインターネットで視聴することが可能である $^{17}$ 。この演奏は、現在のトランペットを演奏する際に使用するマウスピースを 用いて行われたものである。前項で述べたように、本来のトランペットはマウスピースを使用し

なかった可能性が高いため、この実験ではトランペット本来の音色は確認できるものの、音階や奏法の復元は不可能であると考えた方がよい。筆者は、演奏者が当初演奏を試みた際に意図する音が出なかったために、現在の楽器で用いるマウスピースを使用したのではないかと推察する。

なお、この実験に関しては、それより 6 年前の 1933 年にパーシヴァル・ロブソン・カービー  $^{18}$  が TUT's Trumpets を吹いた、とする記録もある  $^{19}$  。これは非公式なものとされているが、とすれば最初に TUT's Trumpets を演奏したのはジェームズではなくカービー、ということになる。彼は音を出すのはかなり難しく、一音しか出なかった、と述べている  $^{20}$  。

最後に、1941年に行われたヒックマンによる検証実験では、マウスピースを使用せず、レプリカを用いている。1939年のジェームズの演奏により、トランペット1に傷がついてしまったためである。ヒックマンは、トランペット1はドよりやや低い音、トランペット2はドからドのシャープの中間の音が出た、と記録している $^{21}$ 。しかし音楽学的にみれば、トランペットは唇を震わせ、息を調節して音を出す楽器であるため、専門の奏者でない限り演奏をすることは難しいのが実情である。

すなわち、金管楽器の演奏経験者でなければ演奏が難しい楽器を、実験では非経験者が演奏を 行っている、したがって録音実験の音階は、どれも実際のトランペットから生み出すことができ ない音階であった可能性が高いと推定される。

### 4 おわりに

現在のナチュラルトランペットは、古代のトランペットと形状が似ている。しかし、現代のものよりは管が短いため、軽い音が出る可能性が高い。加えて前述したように、この古代の楽器で音程を作り出すのはかなり困難である。共鳴特性の予想<sup>22)</sup>からも、音は1音もしくは2音を作り出すのが限界と考えられるため、ファンファーレの演奏は不可能とみた方が良い。

この点に関しては、今後正確な測定を行った上で3Dプリンターなどを用いて復元品を制作し、 実際にトランペット奏者が演奏することによって正しい奏法の理解が進む可能性があろう。

以上の分析や議論から、古代エジプトのトランペットは楽器として演奏されたものではなく、信号楽器、もしくは軍隊等が伝令に用いたものであったと考えられる。ただしトランペット1については、その素材が高価な銀であることから演奏目的ではなく、副葬用に特別に制作されたものであった可能性も今後検討する必要があろう。

これまで、TUT's Trumpets は西洋音楽楽器のトランペットの原型と考えられ、本研究ノートでも便宜上「トランペット」と表記をしたが、マウスピースの有無や演奏可能な音程の予測、そしてその使用目的などから、ペット属には確かに分類されるものの、トランペットの原型と断定するにはかなり無理があるように結論づけることができる。これらの特徴からは、ホルンの原型としても音楽学的には誤りでないためである<sup>23)</sup>。

このように、図像資料のみからその用途を判別するのではなく、遺物資料の実見調査を行い、

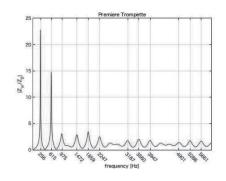
1つ1つの楽器について演奏法や実際の音も考慮に入れ、慎重に古代エジプトの音楽に関わるさらなる調査を進めていきたい。

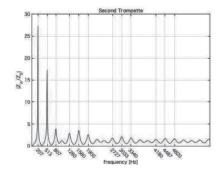
#### 注

- 1) マニケ 1996: 29。
- 2) マニケ 1996: 144。
- 3) ヒックマン 1986:41
- 4) Hickmann 1986: 5
- 5) メトロポリタン博物館 1985.328.9 資料解説参照。
- 6) 埋葬後、少なくとも2回は古代の墓泥棒が墓に侵入した形跡が確認されている。
- 7) Ziegler 1979: 97
- 8) マニケ 1996: 142
- 9) マニケ 1996: 143
- 10) マニケ 1996: 148。
- 11) 後の時代に、冥界の神オシリスに向かってトランペットを吹く様子が描かれた棺が存在する。 Wolfram, Grajetzki. 2003. <u>Burial Customs in Ancient Egypt: Life in Death for Rich and Poor.</u> London, pp. 7-16.
- 12) 長さ1.36m、脚付きで彩色が施された木箱。ライオンの頭を持つ儀式用ベットの前に置かれていた。
- 13) マニケ 1996: 150
- 14) Manicche 1976: 11 ラムセス 2 世の軍隊には、ラー軍、セト軍など軍隊に神々の名前が付けられていた。
- 15) クラッパーには王名を記したカルトゥーシュが描かれており、アマルナ時代のアメンヘテプ4世(アクエンアテン) の娘、メリトアテンのものであったことが確認されている。
- 16) マニケ 1996: 147。
- 17) King Tutankhamun's Trumpets played after 3000+Year (https://www.youtube.com/watch? v=Qt9AyV3hnlc より) 2016.10.20 にアクセス確認済み。
- 18) パーソヴァル・ロブソン・カービー (1887-1970) は、南アフリカの音楽学者である。 後にビットウォータズランド大学の音楽学部長に就任。トランペットを吹いた事実については、彼 の自伝に記録されている。
- 19) マニケ 1996: 145。
- 20) マニケ 1996: 146。
- 21) マニケ 1996: 144。
- 22) 音響学では、管の内側の断面積から周波数を予測し、どのような音が出るかについてある程度知ることが可能である。以下の表は、音響管のシュミレーション結果である。管内径の断面積が計算できる場合、数値計算でその管が持つモードが予測可能であり、その結果、周波数に対する入力インピーダンス値を求めることができる。表は縦軸が入力インピーダンス、横軸が周波数である。入力インピーダンスの値が高いところに菅のモードがあり、その周波数を基本周波数とする唇の振動は出しやすい、という結果になる。そのため、トランペット1は少なくとも256Hz、615Hzの音は

出すことができる。トランペット2は、207Hzと513Hzの音は出すことができる、と予測される。 しかしこれはあくまでシュミレーションの結果に過ぎないため、全く他の音を出すことが不可能で あると断言はできない。

(資料提供、御協力:京都市立芸術大学 津崎実教授)





23) 金管楽器の系統は、ホルン系とトランペット系に分かれ、そこから更にホルン属とコルネット属、及びトランペット属とトロンボーン属に細分される。分類上は4つの属に分類できるが、元来のルーツは同じものであるため、明確に区別することはできない。角笛の円錐管が基本となって発達した楽器をホルン系とし、円筒管に近づいて発達した楽器をトランペット系と仮称している。

その上でホルン系は、現在のフレンチ・ホルンであるホルン属と、現在のコルネット・サクソルン・テューバなどに類するコルネット属に分類される。トランペット系は、ヴァルヴ・システムに代表されるトランペット属と、スライド・システムに代表されるトロンボーン属に分類される。

つまり、楽器形状と演奏状況から判断して楽器は分類されることから、ホルン系かトランペット 系か一概に判断するのは難しい。

## 参考文献

ハンス・ヒックマン (1986) 『人間と音楽の歴史――エジプト』音楽之友社.

ニコラス・リーヴス、近藤二郎訳(1993)『図説 黄金のツタンカーメン(The Complete Tutankhamun)』 原書房

リーサ・マニケ、松本恵訳、(1996)『古代エジプトの音楽 (Music and Musicians in Ancient Egypt)』弥呂久. アルベルト・シリオッティ、吉田春美訳(1998)『ピラミッド(The Pyramids)』河出書房新社.

西村洋子(1998)『古代エジプト語基本単語集』平凡社.

吉成薫(2000)『エジプト王国三千年』講談社.

リチャード・H・ウィルキンソン、内田杉彦訳(2002)『古代エジプト神殿大百科(The Complete Temples of Ancient Egypt)』東洋書林.

ブリジット・マクダーモット、近藤二郎訳(2003)『古代エジプト文化とヒエログリフ(Decoding Egyptian Hieroglyphs How to Read the Sacred Language of the Pharaohs)』 産調出版.

イアン・ショー、近藤二郎訳(2007)『古代エジプト(Ancient Egypt)』岩波書店.

Hickmann, Hans. 1946. La Trompette dans L'Egypt ancienne. Cairo.

#### instruments de musique. France.

- ———. 1954. "La problème de la notation dans l'Egypte ancienne." in *Bulletin de l'institut d'Egypte* 36: 399–531.
- . 1956. "Une scene de musique pharaonique." in Revue belge de musicology 10: 1–2.
- ———. 1958. "La chironomie dans l'Egypte pharaonique." in Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde 83; 96–127.
- . 1958. "La musique polyphonique dans l'Egypte anicienne." Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumkskunde 83: 96–127.
- . 1949. "Sur les survivances de la chironomie égyptienne dans le chant liturgiquecopte." Miscellanea musicologica 3: 417-421.

Manniche, Lise. 1975. Ancient Egyptian Instruments. Berlin.

- ———. 1976. Musical Instruments from the Tomb of Tutankhamen. London.
- . 1991. Music and Musicians in Ancient Egypt. London.

Cater, H and A Mace. 1923-1933. The Tomb of Tut.Ankh.Amen Vols. I-III. London.

, Ziegler Christiane. 1979. Catalogue des instruments de musique egyptiens. Paris.